教えることの難しさ

小松建男　筑波フォーラム編集委員
人文社会科学研究科文芸・言語専攻准教授
（こまつ たけお／中国文学）

松田編集委員長が前号で予告した通り、『筑波フォーラム』が変わりました。本誌を手に取っていただいただけではおわかりいただけないところでは、従来年3回発行だったところが、年4回発行に変わりました。したがって現編集委員会は、第80号まで担当します。この編集後記も、従来と異なり、「本号を読んで」、何か書くことになりました。というわけで、今第77号を一足先に読んでいます。

私は、これまでも『筑波フォーラム』を楽しみにしていました。それは分野の異なる方々のことを知る楽しみです。今「学内の眼：私の授業」と「学外の眼」を読んでいますが、教師としての悩みは分野を超えても同じであると感じています。それ故、今号にお書きいただいた、様々な工夫をしてよい授業を実践なさっている方々に敬意を表します。

私も、受講生が多様になってしまい、何をどのように教えたらよいのか、どのような基準で評価したらよいのかと悩みながら、「中国語辞典や漢和辞典は、使用頻度順ではなく、基本義から派生義へと意味を並べてある。よく使われる意味が、後の方に出てくることが多いから、辞典の冒頭に出ている意味をつなげて意味不明の訳をするな」と言い続けています。

中国文学の悩みは、授業を国語教員になるために取りに来る学生もいることです。そういう学生には、教師になった時に、筑波大の卒業生として恥ずかしくないようにと考えるので、教職と専門という両面の敵を受け、衆寡敵し難い状態に苦しんでいます。

私の授業は、教えを受けた先生方のやり方とどこか似ています。一人ではなく複数の方々の授業から、自分にとって役立った有り難いと思ったものを取り入れてきたからです。一種の師承でしょうか。できれば私も、未来の教員にまねされるような授業をしたいと思っているのですが、前途程遠し、なかなか難しそうです。